子ども主体の体育授業における教師のかかわりと学級経営

－社会構成主義の立場に立って－

福井　啓史（鳴門教育大学）

１．目的

本研究では，置籍校にある学級経営がうまくいっていないという現状を改善すべく，教育観の転換を図っていく。最新の学級経営に必要な教師の経営観や子どもへの関わり方は，社会構成主義の立場に立った体育学習の学習観や子どもとの関わり方と同じではないかと考え，体育学習から転移できるものはなにか，実践を通して考えていく。

２．研究方法

大きく２つの実践を行う。FW１では，社会構成主義の立場に立った体育の授業を筆者が実践する。実践を通して，学級担任の先生方に，社会構成主義の立場にたった授業の良さを理解していただくとともに，そこでの教師の役割において何が大切なのかを明らかにする。FW２では，FW１で明らかになった教師の役割を，６年２組において体育の授業や学級経営にいかしていくことで，子ども主体の教育における教師の関わりを明らかにしていきたい。

１）対象者　：小学１～６年生（FW１）
　　６年２組児童　26 名（FW２）

２）調査期間：令和５年４月 10 日～12 月 22 日

３）分析方法：児童観察による子どもの変容等

３．結果と考察

FW１，FW２の実践を通した児童観察から，子ども主体の教育を実現するための教師の役割として以下の４つが見えてきた。

１）探求しがいのあるテーマを設定する

テーマを設定し，共有することで，学級集団は「よりよいもの」を創り出していこうとする「実践共同体」になっていく様子が見られた。

２）子どもに問題解決を委ねる

子どもが自由に「選択」して活動できる設定を行うことで，主体的に挑戦を続ける姿が見られた。櫻井（2009）の「自己決定理論の度合いと動機づけ」にあるように，自己決定の高さが高ければ高いほど内発的に動機づけられ，子どもにポジティブな感情を生み出し，主体的に挑戦を続けたものと考える。

３）学びのサイクルを回すことができる手立て

FW２の実践「そうじプロジェクト」では，続けていくうちに意欲が低下した現状があった。これは，どう次の挑戦を見つければいいのか分からないことが要因としてあげられる。このことから振り返りを核とする「学びのサイクルを回すことができる手立て」が必要だと考えた。

４）協働行為者として存在する

FW２での実践の観察を通して，協働行為者として存在することが大切であることが分かった。主に「コーディネーター」「ファシリテーター」「ジェネレーター」という役割を場面に応じて果たすことが必要である。

４．結論

実践を通して，４つの役割は有効に働くということと同時に，全ての先生方に実行してもらうには難しさもあるということを感じた。それは「教師観の転換が簡単ではない」「子どもの変化に時間がかかる」「学校組織としての方向性に左右される」の３つのことからである。しかしながら，教師には，これからの時代を生きていく子どもに「子ども主体の教育を実現していく」責任がある。子ども主体の教育を進めていけるよう取り組んでいきたい。

５．引用・参考文献

１）佐伯胖，「『学ぶ』ということの意味」，岩波書店，p147，1995

２）櫻井茂男，「自ら学ぶ意欲の心理学--キャリア発達の視点を加えて」，有斐閣，p102，2009